

— 実践報告 —

看護基礎教育低学年次におけるシミュレーション学習の学びと課題

— デブリーフィングからの学びの記述より —

中西 京子¹⁾, 本田 可奈子²⁾, 岡 美登里¹⁾, 山下 敬¹⁾

1) 滋賀医科大学医学部看護学科

2) 滋賀県立大学人間看護学部

抄録: 目的: 本研究は、看護基礎教育低学年次におけるシミュレーション学習によるデブリーフィングからの学びを明らかにすることにより、低学年次のシミュレーション学習の課題を見出すことを目的とした。方法: 対象は看護系A大学2年次生60名、看護技術論IVにおいて4事例のシミュレーション学習を実施後、デブリーフィングでの学びについての記述を分析データとし、質的帰納的に分析した。結果: シミュレーション学習におけるデブリーフィングからの学びは、【知識・根拠に基づくアセスメントの必要性】【既習技術の個別性への適用方法】【意見の多様性からの学びの深まり】【主体的な学びの姿勢】の4カテゴリー、今後の課題の明確化は、【専門的知識の充足】【判断能力の向上】【個別性を考慮した具体的な援助計画の立案】【看護技術の向上】の4カテゴリーが見出された。考察: デブリーフィングにより、今までの学びを再確認し次への課題を見出すという思考の深まりを体験していた。低学年次は、タスクトレーニングが主であり、今回の演習では、知識・技術の定着はもちろんであるが、既習の知識・技術をどのように統合し、対象者に援助するかを主体的に学ぶことができた。今後は、さらに繰り返し学ぶことができるカリキュラムの構築及びシミュレーションシナリオ等の教材検討を行っていきたい。

キーワード: 看護基礎教育低学年次 シミュレーション学習 デブリーフィング 看護実践能力

はじめに

厚生労働省は2019年10月15日に「看護基礎教育検討会報告書」を公開し、2022年からの看護基礎教育の第5次改正において、「臨床判断を行うための基礎的能力」の育成について提示した^[1]。これは、看護師の活動の場が病院から地域へと広がってきていることにより、看護職個々の臨床判断能力が今まで以上に求められているといった背景によるものである。この臨床判断能力の育成にはメタ認知のスキルが重要であることが指摘されている^[2]。

2011年厚生労働省の「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」^[3]において、シミュレーション教育の必要性が提示されて以降、看護基礎教育機関では、基礎看護学領域の技術演習^[4, 5, 6, 7, 8]や急性期等の実習前の学習方法^[9, 10]としてシミュレーション教育を取り入れている。シミュレーション教育とは、模擬的な状況の中で、学習者としての個人やチームが医療を経験し、その経験に基づいて、最善の医療を実践するにはどのような専門的な知識・技術・態度を備えていなければならないのかを、学習者同士のディスカッションを中心に、関連資料を活用し、指導者からのフィードバックを参考にしながら医療者としての能力を向上し

ていく教育である^[11]。また、学習者の知識と技術の統合により実践力を強化する教育で、メタ認知育成にも効果があると考えられている。看護学におけるシミュレーション学習は、一般的に事前学習、ブリーフィング、シミュレーション、デブリーフィング、評価のプロセスで行われ、特にデブリーフィングがシミュレーションのなかで最も教育効果が高いといわれている。デブリーフィングとは振り返りを意味し、シミュレーションでの経験を目標に沿って振り返り、さらによくするために実際に体験した学習者と観察者が主体的にディスカッションを行うことである。低学年次では、清拭や車いす移乗などのタスクトレーニングで用いられ、事例によるシミュレーション学習は主に高学年次の実習前学習で実施されている。しかし、メタ認知の強化や領域実習に向けた看護実践能力の強化の為に、低学年次からシナリオシミュレーションを実践することが必要であると考えられる。以上のことから本研究は、看護基礎教育低学年次におけるシミュレーション学習によるデブリーフィングからの学びを明らかにすることにより、低学年次のシミュレーション教育の課題を見出すことを目的とした。本研究により、看護実践能力の育成への示唆が得られると考える。

Received: April 17, 2020 Accepted: November 16, 2020

Correspondence: 滋賀医科大学医学部看護学科基礎看護学講座 中西 京子

〒520-2192 大津市瀬田月輪町 naka320@belle.shiga-med.ac.jp

用語の定義

1. シミュレーション学習

事例により模擬的な状況を設定し、シミュレーターを用いて看護実践課題を体験する学習方法のこと。

2. ブリーフィング

学習目標、シミュレーションの課題を確認すること。

3. デブリーフィング

学習者同士のディスカッションで学習を進めていき、実施したシミュレーションを目標に沿って振り返ること。

授業概要

1. 学習演習の位置づけ

看護技術論Ⅳは、2年次の後期配当科目である。1年次および2年次前期に看護技術論Ⅰ～Ⅲにより、基礎看護技術の学習をほぼ終了し、看護過程の実習を終了後、看護技術を統合・応用・創造し、最善の看護を実践する意義と方法を学習する目的で位置付けた科目である。

2. 対象学生及びレディネス

1) 対象学生

2年次生 60名、1グループ4名～5名の14グループ編成とした。

2) 学生のレディネス

1年次には人体の構造と生理機能、病気の成り立ち、フィジカルアセスメント、看護学原論、看護理論、看護技術論Ⅰ・Ⅱ、看護過程論Ⅰを履修し、2年次には看護過程論Ⅱ、看護技術論Ⅲ、そして2018年9月に基礎看護学実習Ⅱ（看護過程の展開）を修了している。

3. 学習目標

技術の統合演習の学習目標は以下の2点とした。

①各事例の看護計画を基に、シミュレーターを用いて、個々の事例に適した援助を実施することができる。

②実施した援助の妥当性を検討することができる。

4. 演習展開（表1）

1) 演習事例

以下の4事例を学生に提示し、各グループの選択性とした。①、②、④の事例はそれぞれに4つのグループ、③の事例は、2つのグループが選択した。

- ①脳梗塞回復期患者のADL自立に向けての援助
- ②急性心筋梗塞患者のフィジカルアセスメント
- ③肝硬変の終末期にある患者の死に対する不安への援助
- ④Ⅱ型糖尿病患者の状態観察

2) 演習の展開

演習までの学習としては、個別及びグループ学習として、各事例のアセスメント、看護診断、看護計画の立案までを課題とした。授業内容は、第1回目に事例を提示、第4回目までに看護計画の立案を課題とした。

表1. シミュレーションテーマ・演習目標・課題一覧

事例 (テーマ)	演習目標	演習課題
① 脳梗塞回復期患者のADL自立に向けての援助	1. 車いす移動前の患者の状態をアセスメントできる。 2. 車いす移乗が安全にできる。	車いすに移動する前に患者の状態を観察し、車いすへ移乗してください。
② 急性心筋梗塞患者のフィジカルアセスメント	1. 援助前の患者の状態を観察できる。 2. 援助前の患者の状態をアセスメントし報告ができる。	10時から洗髪の援助を予定していません。洗髪前の患者の観察を行い、指導者へ報告してください。
③ 肝硬変の終末期にある患者の死に対する不安への援助	1. 終末期にある患者への安楽への援助ができる。 2. 患者の思いを傾聴できる。	ベッド上で足浴終了後に下肢のマッサージをしながら患者の思いを聞いてください。
④ Ⅱ型糖尿病患者の状態観察	1. Ⅱ型糖尿病患者の観察項目を理解し、優先度を考慮した観察ができる。 2. 患者が異常時（低血糖症状）医療者に報告できる。	患者は、昨日夕食後、饅頭を1個食べ、それを看護師が発見しました。本日10時、患者の状態を観察し、報告してください。

第5回目～第7回目は、事例①②のシミュレーション学習、第8回目～第10回目は、事例③④のシミュレーション学習を実施した(表2)。演習の進め方としては、ブリーフィング30分、シミュレーション(1回目)10分、デブリーフィング20分、シミュレーション(2回目)10分、デブリーフィング20分と1事例ごとに実施した。

表2. 授業内容

回	内容
第1回	事例提示(4事例)・展開事例の決定 アセスメント
第2回	関連図・看護診断
第3回	看護計画の立案
第4回	看護計画の立案
第5回 ～第7回	シミュレーション学習 事例①、事例② 評価の記入
第8回 ～第10回	シミュレーション学習 事例③、事例④ 評価の記入

方法

1. 対象

看護系A大学2年次生60名

2. データ収集方法

看護技術論Ⅳにおいて4事例のシミュレーション学習を実施後、評価表として「演習の展開に関する評価」を5段階で自己評価してもらい、「シミュレーションについて」「デブリーフィングでの学び」については、記述式で評価を記入してもらった。本研究では、「デブリーフィングでの学び」のみをデータとして用いた。2018

年11月、「デブリーフィングでの学び」の原本をコピーし、氏名部分を切り取り、学生に原本と共に返却し、研究概要を説明後、研究参加同意者には、コピーした氏名のないレポートを研究者の目に触れない提出場所に提出してもらった。

3. 分析方法

本研究では「デブリーフィングでの学び」についての記述を分析データとし、質的帰納的に分析した。まず、デブリーフィングについて感じたことや学んだことについての文脈を抽出し、意味をまとまりごとにコード化した。得られたコードの持つ意味内容の類似性や相違性を意識して分類・統合し、サブカテゴリーを生成した。さらに生成したサブカテゴリーを意味内容の類似性や相違性によって分類・統合し、カテゴリーを生成した。さらにそれぞれのカテゴリーの特性に着目してコアカテゴリーを生成した。また、結果の厳密性を確保するために、著者の解釈やカテゴリー化に歪みや偏りがないかについて共著者との合意が得られるまで検討した。

4. 倫理的配慮

本研究は、滋賀医科大学倫理審査委員会で審査を受けた上、学長の許可を得て実施した(29-108)。

研究の協力依頼に関しては、授業の科目責任者ではない研究者が文書を用いて口頭で本研究の趣旨、研究への協力は自由意思であり、協力しない場合でも学業成績等の不利益を被ることがないことを説明し、提出により同意を得たものとした。また、提出場所に関しては、提出用の箱を設置し、研究者の目に触れないように配慮した。

結果

分析を行った結果、全体で172のコードが得られ、22のサブカテゴリーが生成され、そこから8のカテゴリーに集約された。そして、さらに2のコアカテゴリーが見出された。以下、コアカテゴリーごとに、分析結果を、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは〈 〉、コードは「 」で示す。

1. 対象者の概要

分析対象者は、本研究の同意の得られた60名

2. コアカテゴリー「デブリーフィングからの学び」(表3)

シミュレーション学習におけるデブリーフィングからの学びについては、【知識・根拠に基づくアセスメントの必要性】、【既習技術の個別性への適用方法】、【意見の多様性からの学びの深まり】、【主体的な学びの姿勢】の4のカテゴリー、10のサブカテゴリーが抽出された。

1) 【知識・根拠に基づくアセスメントの必要性】

学生たちは、看護する上において「アセスメントがしっかりと行えるようになれば、看護計画・実施内容が質の高いものになる」といった〈根拠に基づくアセス

メントの必要性〉を記述していた。また、「看護計画の妥当性を考える中でまず一番大切なのは患者とその疾患についての知識が不可欠である」といった〈疾患の知識が不可欠〉であることを記述していた。以上より【知識・根拠に基づくアセスメントの必要性】は、2つのサブカテゴリーから構成されていた。

2) 【既習技術の個別性への適用方法】

基礎看護技術については、「基本的なバイタル測定1つにしても根拠のある優先順位をつけ、アセスメントを含めた報告が大切」、「右麻痺の人の車椅子移乗について調べ、方法が一つではないことを学んだ」といった〈既習技術の個別性を考慮した適用方法〉を記述していた。また、「患者の思いを肯定し、どうすることが大事かということを学んだ」といった〈対人関係技術の再確認〉についての記述をしていた。以上より【既習技術の個別性への適用方法】は、2つのサブカテゴリーから構成されていた。

3) 【意見の多様性からの学びの深まり】

学生同士のディスカッションにより、「班・人によって同じことを学んでいても意見が分かれる」、「自分が見えていなかった視点から患者を見ることが出来た」といった〈視座の転換〉を経験していた。そして、「根拠のある意見を共有できた」や「みんなで考えることの大切さとか楽しさを学んだ」といった〈思考の共有〉による学ぶことの楽しさも表現していた。また、「援助の後すぐに反省できるので次の援助に改善点を活かしやすかった」といった〈リフレクションの有用性〉を表現していた。「自分が援助していると見ることができない患者の動きや全体像を見ることが出来、今まで気づけなかったことに気づけた」「実施の後の評価がいかにか大事かよく学べた」といった〈評価・客観視からの学び〉について表現していた。以上より【意見の多様性からの学びの深まり】は、4つのサブカテゴリーから構成されていた。

4) 【主体的な学びの姿勢】

学生たちは、この意見交換に対して「自分が他の人の意見から学んでいるように、私の意見でみんなが学んでいるのではないか」と思い、積極的に意見を言う大切さを学んだ」といった〈積極的な意見交換〉について記述していた。また、「実際にやってみるからこそ気づくことや、思いつく援助がある」といった〈援助の実際の試行〉について記述していた。以上より【主体的な学びの姿勢】は、2つのサブカテゴリーから構成されていた。

3. コアカテゴリー「今後の課題の明確化」

(表4)

多くの学生たちは、デブリーフィングの学びの記述と同時に、自分に何が不足しているのか、何を補わなければならないのかという課題を記述していた。今後の課題の明確化については、【専門的知識の充足】、【判断力の向上】、【個別性を考慮した具体的な援助計画の

看護基礎教育低学年次におけるシミュレーション学習の学びと課題

表 3. デブリーフィングからの学び

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
知識・根拠に基づくアセスメントの必要性	根拠に基づくアセスメントの必要性	アセスメントがしっかりと行えるようになれば、看護計画・実施内容が質の高いものになる(11) 一つ一つの症状や数値に根拠をもってアセスメントする必要がある(3)
	疾患の知識が不可欠	疾患を知り、目の前にいる患者の症状から、何が出来るかというステップで看護を行わないといけない(1) 看護計画の妥当性を考える中でまず一番大切なのは患者とその疾患についての知識が不可欠である(9)
既習技術の個別性への適用方法	既習技術の個別性を考慮した適用方法	基本的なバイタル測定1つにしても根拠のある優先順位をつけ、アセスメントを含めた報告が大切(7) 右麻痺の人の車椅子移乗について調べ、方法が一つではないことを学んだ(6)
	対人関係技術の確認	手指消毒など初歩的なところに気づかされた(3) 患者の思いを肯定し、どうすることが大事かということを学んだ(5) 患者・看護師がお互い落ち着いて話が出来ると環境づくりや、会話のテンポの作り方ができることが必要(7)
意見の多様性からの学びの深まり	視座の転換	班・人によって同じことを学んでいても意見が分かれる(4) 自分では気づくことができなかったことがたくさんあった(12) 自分が見えていなかった視点から患者を見ることが出来た(15) 根拠のある意見を共有できた(5)
	思考の共有	教科書を参考にして、皆で話し合い、多くの知識を得ることができた(15) みんなで考えることの大切さとか楽しさを学んだ(4)
主体的な学びの姿勢	リフレクションの有 用性	援助の後すぐに反省できるので次の援助に改善点を活かしやすかった(11) 自分の考えを見つめなおす良い時間だった(3)
	評価・客観視からの 学び	自分が援助していると見ることができない患者の動きや全体像を見ることが出来、今まで気づけなかったことに気づけた(12) 実施の後の評価がいかに大事かよく学べた(8)
主体的な学びの 姿勢	積極的な意見交換	自分が他の人の意見から学んでいるように、私の意見でみんなが学んでいるのではないかと思い、積極的に意見を言う大切さを学んだ(6)
	援助の実際の試行	実際にやってみるからこそ気づくことや、思いつく援助がある(3)

表 4. 今後の課題の明確化

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
専門的知識の 充足	専門用語を覚える	専門用語を覚えないうちについていけない(1)
	解剖生理学、病態学について更なる理解を深める	解剖生理学、病態学について更なる理解を深めることが必要だ(4)
	知識を増やすために授業を大切に する	すべてにおいて授業を大切にしようと改めて思った(2)
判断能力の 向上	アセスメントする力をつける	バイタルが異常値だということはわかるが、それが患者さんにとってどうか、原因はなにかという症状アセスメントができる思考回路が自然に出来るかというと思った(3)
	判断できる能力をつける	判断できる能力を身につけたい(1)
	全体的に見ることが出来る視野を 身につける	視野を広げて全体的に見ることが出来る視野を身につけたい(1)
個別性を考慮 した具体的な 援助計画の 立案	イメージしながら考える	麻痺のある患者さんはどのようなことができないのかについて、イメージしながら考える(1)
	具体的な看護計画を立案する	自分の中の課題も見えてきて、次のアセスメントや計画立案の改善をしっかりとしていこうと思った(1)
	次のアセスメントや計画立案の改 善に活かす	これから自分が患者さんに対して介助を行う時に取り入れようと思った(5)
看護技術の 向上	学んだ技術を統合する	座学で学んだこと、習った技術が統合できていない(1)
	観察しながら援助する	観察しながら援助をしていくことがまだ難しい(1)
	個別性に 応じた コミュニケーション 技術を身につける	個別性に 応じた コミュニケーション 技術を身につけることが必要だ(1)

立案】、【看護技術の向上】の4のカテゴリー、12のサブカテゴリーが抽出された。【専門的知識の充足】は、〈専門用語を覚える〉〈解剖生理学、病態学について更なる理解を深める〉〈知識を増やすために授業を大切にする〉の3つのサブカテゴリーで構成されていた。【判断能力の向上】は、〈アセスメントする力をつける〉〈判断できる能力をつける〉〈全体的に見ることが出来る視野を身につける〉の3つのサブカテゴリーで構成されていた。【個別性を考慮した具体的な援助計画の立案】は、〈イメージしながら考える〉〈具体的な看護計画を立案する〉〈次のアセスメントや計画立案の改善に活かす〉の3つのサブカテゴリーで構成されていた。【看護技術の向上】は、〈学んだ技術を統合する〉〈観察しながら援助する〉〈個別性に応じたコミュニケーション技術を身につける〉の3つのサブカテゴリーで構成されていた。

考察

今回は、シミュレーション学習におけるデブリーフィングに着目し、デブリーフィングからの学びを考察する。

シミュレーション学習について阿部は^[12]、学習者の段階に応じて3つの段階があり、最初の段階は、状況や症例を基に思考や判断の強化を主目的に行い、次の段階は模擬患者やシミュレーターを利用して実際に行動して学ぶ段階であり、思考と行動の統合を図ることが目的となる。最終段階は、実際の臨床で行うトレーニングであると述べている。

今回おこなった低学年次へのシミュレーション学習は、第1段階、第2段階の学習方法であったと考える。シミュレーション学習によるデブリーフィングから【知識・根拠に基づくアセスメントの必要性】や優先順位をつけてバイタルサインを測定するなど今まで学んだ技術を対象者にどう活用していくかといった【既習技術の個別性への適用方法】といった、知識と技術の統合をしながら学んでいることが明らかになった。【知識・根拠に基づくアセスメントの必要性】は思考や判断力の強化であり、【既習技術の個別性への適用方法】は思考と行動の統合であるといえる。デブリーフィングは、行ったシミュレーションを目標に沿って振り返るセッションであり、学習者が中心となって、ガイドラインや資料を用いながら行った行動の裏付けとなる知識を確認し、不確かな知識を再度学習する^[10]とされている。今回の学生の学びは、まさにこのことを裏付けるものであったと考える。

学生同士のディスカッションは、〈思考の共有〉によって、自分とは違った視点や意見があることに気付くことで〈視座の転換〉をし【意見の多様性からの学びの深まり】に繋がっていることが明らかとなった。三宮は^[13]、仲間と意見や仮説を出し合い、ま

た、共同でそれらを作り上げ、互いに評価し合う。そのような活動の積み重ねがメタ認知を育む土壌になると述べている。メタ認知とは、通常の認知活動をもう一段高いレベルからとらえた認知^[13]を指す。今回のシミュレーション学習は、低学年次の学生にとって、自分の考えや行動を高次のレベルから客観的に捉えるメタ認知のスキルを向上させる教育につながる可能性があることが示唆された。また、学生達が、自由な雰囲気の中で仲間と意見を出し合い、評価するという学習の楽しさを感じていたことは、三宮^[14]が指摘しているメタ認知を伸ばす学習と重なるのではないかと考える。

デブリーフィングに参加する態度について、学生たちは、自分が他の人の意見から学んでいるように、私の意見でみんなが学んでいるのではないかと思ひ、積極的に意見を言う大切さを学んだと記述していた。また、意見交換だけでなく疑問に思ったことは、実際に実施しながら援助方法について考えていることが窺える。これらのことから【主体的な学びの姿勢】の育成につながっていると考える。低学年次は、タスクトレーニングが主である。しかし、今回のシミュレーション学習では、知識・技術の定着はもちろんであるが、既習の知識・技術をどのように統合し、対象者に援助するかを主体的に学ぶことができたと考える。

以上のことから、今回のデブリーフィングは低学年次の学習者にとって、共同思考の場として有効であったと考える。

また、学生たちは、デブリーフィングからの学びとして、今後の課題を記述していた。解剖生理学、病態学について更なる理解を深めることにより【専門的知識の充足】を図り、症状アセスメント及び判断力といった【判断能力の向上】を課題として見出していた。さらに【個別性を考慮した具体的な援助計画の立案】を行い、個別に応じた看護が提供できるための【看護技術の向上】という課題を見出していた。このことは、今までの学びを再確認し次への課題を見出すという思考の深まりを体験していたことが窺える。以上より、シミュレーション学習から、4つの課題を明確にできたことは、自分の考えや行動を高次のレベルから客観的に捉えるメタ認知のスキルを向上させる教育につながっていたのではないかと考える。

先行研究では3年次の、領域実習前教育として状況設定のシミュレーション学習の効果が報告されているが、本研究において、低学年次のシミュレーション学習は、高学年次の領域実習に向けての、判断能力や看護技術の習得という看護実践能力の育成につながり、領域実習前の学習として、臨地実習へのイメージ化を図ることからも意義があったと考える。今後は、さらに繰り返し学ぶことができるカリキュラムの構築及び

シミュレーションシナリオ等の教材検討を行っていき
たい。

研究の限界と課題

今回は、シミュレーション学習のデブリーフィング
に着目した分析であり、シミュレーション学習全体の
評価には至っていない。今後は、シナリオも含めた全
体的な評価を行い、シミュレーション学習の効果の検
証を行っていききたい。また、さらに基礎看護技術教育
に組み込み、繰り返し学ぶことができるカリキュラム
の構築及びシミュレーションシナリオ等の教材検討を
行っていききたい。

結語

看護系A大学2年次生60名を対象にシミュレーショ
ン学習を実施した。今回は、シミュレーション学習
におけるデブリーフィングに着目し、デブリーフィ
ングからの学びを考察した結果、以下の点が明らか
になった。

1. シミュレーション学習におけるデブリーフィング
の学びについては、【知識・根拠に基づくアセスメ
ントの必要性】、【既習技術の個別性への適用方法】、
【意見の多様性からの学びの深まり】、【主体的な
学び姿勢】の4カテゴリーが抽出された。
2. 今後の課題の明確化については、【専門的知識の充
足】、【判断能力の向上】、【個別性を考慮した具
体的な援助計画の立案】、【看護技術の向上】の4
カテゴリーが抽出された。
3. 今回のデブリーフィングは、共同思考の場として有
効であった。
4. 低学年次へのシミュレーション学習は、メタ認知の
スキルを向上させる教育につながる可能性がある
ことが示唆された。
5. シナリオも含めたシミュレーション学習全体の評
価を今後の課題とする。

本研究は、平成29年度科学研究費助成事業基盤
(C) 研究課題名：低学年の看護学生を対象にメタ
認知を強化する教育プログラム開発（課題番号 17K
12116）の助成を得て実施している。また、本研究は
2019年第39回日本看護科学学会学術集会にて報告し
ている。

本研究では利益相反関係にある企業は存在しな
い。

謝辞

本研究にご協力いただきました2年次生の皆様に深
く感謝申し上げます。

文献

- [1] 厚生労働省:看護基礎教育検討会報告書.2020-3-2.
<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557405.pdf>.
- [2] 岡田純子, 森木ゆう子, 中山由美, 田丸朋子, 坂井利衣, 田中結華. 看護師のメタ認知的スキルの獲得を促す院内教育に関する文献検討. 摂南大学看護学研究, 3(1):16-23, 2015.
- [3] 厚生労働省:看護教育の内容と方法に関する検討会報告書. 2020-3-2.
<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf>.
- [4] 江尻晴美, 荒川尚子, 松田麗子, 中山奈津紀. 看護基礎教育における中/高忠実度シミュレーターを使用した教育に関する研究の動向. 看護科学研究, 17: 37-44, 2019.
- [5] 鈴木真由美, 刈部亜美, 熊谷寛美, 下村美枝子, 田中真由美. 基礎看護学領域のシミュレーション演習における学生の体験と学びの様相. 相模女子短期大学紀要, 34: 47-67, 2017.
- [6] 尾形裕子, 岩坂信子. 看護基礎教育における周手術期の看護過程にシミュレーション演習を取り入れた効果の検討. 北海道文教大学研究紀要, 41: 109-118, 2017.
- [7] 伊藤朗子, 富澤理恵, 山本直美, 登喜和江, 山本純子, 梅川奈々. シミュレーション教育を用いた基礎看護技術演習の評価. 千里金蘭大学紀要, 12: 51-59, 2015.
- [8] 貞永千佳生, 永井廉央, 今井多樹子, 中垣和子, 船橋眞子, 黒田寿美恵. 看護基礎教育における一次救命処置演習に対するシナリオを活用したシミュレーション教育の学習効果. 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌, 14(1): 87-89, 2014.
- [9] 中本明世, 池田七衣, 新井祐恵, 北尾良太, 森岡広美, 山中政子, 山中純瑚. 成人看護学演習において模擬患者を演じた上級生の経験ーリフレクションに基づいた教育的効果の検討ー. 日本看護科学学会誌, 41(2): 129-136, 2018.
- [10] 本田可奈子, 大澤伸治, 大橋英治, 廣瀬真弓, 武藤英理. シミュレーション学習を活用した急性期看護学実習前学習の支援:臨床看護師との協働の試み. 滋賀医科大学雑誌, 32(2): 12-19, 2019.
- [11] 阿部幸恵著. 看護のためのシミュレーション教育ははじめの一步ワークブック第2版. 東京:日本看護協会出版会, 2016.
- [12] 阿部幸恵. 医療におけるシミュレーション教育. 日本集中医療医学会誌, 23(1): 13-20, 2016.
- [13] 三宮真智子. メタ認知能力を伸ばす. 日本科学教育学会研究会研究報告, 13(2): 45-48, 1998.
- [14] 三宮真智子. メタ認知ー学習力を支える高次認知機能ー. 北大路書房, 2008.

Learning and Issues of Simulation Learning in lower grades of basic nursing education

Kyoko NAKANISHI¹⁾, Kanako HONDA²⁾, Midori OKA¹⁾, and Satoshi YAMASHITA¹⁾

1) Department of Nursing, Shiga University of Medical Science

2) University of Shiga Prefecture, School of Human Nursing